

## はじめに

東京美術学校は明治二十年十月四日に文部省直轄学校の一つとして設置され、同二十二年二月一日に開校した。国立の美術学校としてはそれ以前に明治九年創設の工部美術学校があったが、同十六年には廃止され、四年の空白を経て登場したのが本校であった。ただし本校は、工部美術学校が国策上、明治政府が一方的に設立した学校であり、西欧美術移植を専らとする教育を行ったのに対して、一つの美術運動が政府を動かした結果設立された学校であり、日本美術の伝統に根ざした教育を行うことを目的としていたのであって、設立の経緯も学校としての性格も著しく相違していた。世上、本校を工部美術学校の後身であると記したものを往々見かけるが、それは誤りであって、本校が発足に当たって工部美術学校から直接引き継いだものはほとんど何もなく、創立者の考え方から言えば工部美術学校というものはまさに反省材料でしかなかったのである。なお、本校設立当時、公立の美術学校としては明治十二年創立の京都府画学校（現京都市立芸術大学の前身）があった。

本校は端的に言えばフェノロサ、岡倉覚三その他の先覚による日本美術復興運動の中から生まれた学校であり、創立後しばらくの間はその運動の理念が教育、研究活動全般に強く反映していた。本校の歴史を通観すると、その時代は期間こそ短いがさまざまな面で重

要な意味を持つ特殊な時代であったと思われるので、本巻においては、本校創立前史を含めてこの時代の終焉を象徴する岡倉覚三校長退陣、すなわち明治三十一年までに範囲を定め、その間の変遷を資料に基づいて記述する。

開校後の歴史に関する資料としては毎年作成された公的記録であるところの「東京美術学校年報」および『東京美術学校一覽』があり、外に校友会機関誌『錦巷雜綴』、「諸新聞切抜」、あるいは本学芸術資料館所蔵の授業手本や成績作品など、まとまった資料も残っているが、明治四十四年の東京美術学校火災で本館所蔵の文書類が焼失したため、細部に互って変遷を把握することは困難である。特に、図画取調掛時代から開校前夜にかけての時期は校史の冒頭にあたる重要な部分であるにも拘らず、その記録文書はやはり焼失してしまったと見え、変遷を辿ることができない。本巻編集にあたって学外各方面に資料調査を試み、多くの資料を収集し、その結果、校史の筋道は従来より遙かにはっきりして来たとはいえ、隔靴搔痒の部分も多く残していることは否めないだろう。

なお、近年、頓に日本近代美術および美術教育の資料的研究が活発になり、本校史に密接な関係のある文献なども次々と刊行されてきている。それらの研究成果は本巻編集の際の良き参考になった。

